

# 会話データ分析論文を活用した 日本語教員養成課程の授業実践の分析

——接触場面におけるコミュニケーション行動の問題を対象に——

大 場 美 和 子

## 1. 研究の目的

日本語学習者の増加・多様化に伴い、現在では日本語教員養成課程や教員研修は、大学や専門学校などで数多く実施されている。この養成課程の受講生は、将来、教育現場で実際に多様な背景を持つ学習者とコミュニケーションを行う可能性がある。また、実際に、教員にならなかったとしても、「生活者としての外国人」が増加した現在、日常生活において、言語的・文化的背景の異なる人と遭遇する「接触場面」(ネウストプニー1995a)の参加者になる可能性は高い。よって、その接触場面のコミュニケーションにおいて、何らかの問題に遭遇した場合、冷静にその問題を分析して対応する能力が求められる。しかし、地方の比較的小規模な大学では、留学生数も少なく、大学内のコミュニケーションで接触場面を経験する機会が限られる。さらに、その経験が限られた状況にあることにも無自覚である学生も多い。

「会話データ分析」(中井2012)は、日常生活の多様なやりとりをデータとして収集し、そのやりとりの現象を文字化データによって詳細に記述し、やりとりの文脈をふまえて多角的に目的の対象を分析するものであり、日常生活で意識することない会話の現象を具体的かつ詳細に提示することが可能となる。この会話データ分析の論文には、通常、分析対象の現象の集計データとその集計結果の特徴を提示する会話データが掲載されている。よって、接触場面に不慣れな日本人学部生に対し、会話データ分析の論文のデータを活用することで接触場面におけるコミュニケーションの問題を明確に提示し、意識化させることが可能であると考えられる。

以上をふまえ、日本語教員養成課程の授業において、会話データ分析論文を部分的に活用し、接触場面のコミュニケーションの問題を扱う授業を実践した。そこで、本研究では、受講生に接触場面のコミュニケーションで起こりうる問題を意識化させ、接触場面の問題の分析力と対応能力の育成をめざ

した授業の活動について検証することを目的とする。本稿では、まず、授業活動の全体像とともに、どのような会話データ分析論文をどのように活用したのか論文の特徴について述べる。次に、受講生に授業時に課した課題に対する教師の評価の集計から、会話データ分析論文を活用した授業の活動の効果を検証する。授業の実践とその効果を検証することで、日本語教員養成課程の授業においてコミュニケーションの問題を扱う際に、会話データ分析論文を有効に活用できることを主張する。

## 2. 先行研究

ネウストプニー（1995a）は、接触場面で発生する問題として、「言語行動の問題」「コミュニケーション行動の問題」「社会文化行動（実質行動）の問題」の3つをあげている。「言語行動の問題」とは、文法、語彙、発音といったいわゆる言語の問題であるとしている。次に、「コミュニケーション行動の問題」とは、その言語をいかに使用するかという段階の問題であるとしている。さらに、「社会文化行動（実質行動）の問題」とは、社会・文化行動のルールを利用してインターアクションを行う段階の問題であるとしている。

村岡（2003）は、接触場面に関する研究を概観した上で、接触場面では、言語的な逸脱よりも、社会言語的な逸脱、すなわち、コミュニケーション行動の問題が、より相手に否定的に評価される傾向にあると指摘している。社会言語的な逸脱としては、例えば、「挨拶行動のぎこちなさ、非言語行動、あいづちによる共感の表出の不足、話題の提供の少なさ」があげられている（村岡2003: 248）。ネウストプニー（1982）は、これらのコミュニケーション行動に関する規則は、通常、母語場面で共有されているという認識がなく、問題の発生時には、相手の人格などの認識しやすい要素にその原因を求めてしまう傾向にあることを指摘している。よって、接触場面の経験が限られた日本人学部生の場合、このコミュニケーション行動の問題を、その場面で接した外国人の人格を原因としてとらえてしまう可能性がある。そして、接触場面に不慣れであるために異文化を相対的にとらえられず、その接した外国人の国の人の全てがそのような人格であるかのように、一般化してとらえてしまう可能性も考えられる。

ネウストプニー（1995b）は、接触場面における全ての問題が解決できるわけではないという事実を認め、解決できない問題をいかに軽減するかを考えなければならないとしている。そこで、日本人学部生に、会話データ分析論

文によって接触場面のコミュニケーション行動の問題を意識化させ、問題の現象を客観的に分析する活動を行い、さらにその問題に対してどのように対応するのか考察する授業を計画することとした。

### 3. 授業の概要

#### 3.1 学習目標の設定

分析対象の授業は、学部生対象の選択科目「言語とコミュニケーションⅠ」（前期開講、1コマ90分、15回）で、2007年度から2012年度まで筆者が担当した<sup>(1)</sup>。受講生は日本語日本文学科の学生（2～4年）が中心であったが、交換留学生や英語助手（英語母語話者）が参加することもあり、教室場面自体が接触場面となることもあった。授業の計画にあたり、大学内のコミュニケーションで接触場面を経験する機会が限られた日本人学部生の状況から、次の3つの学習目標を設定した。

##### ①接触場面の概念と重要性の意識化

接触場面の概念とその種類を紹介し、現在の日本では日常生活に多様な接触場面が数多くある点、母語場面とは異なるやりとりになりうる点、そのやりとりの参加者になる可能性が高い点を意識化させる。

##### ②接触場面と母語場面における問題の分析力の育成

普段は無意識に行っているコミュニケーション行動の問題を客観的に分析する能力を育成する。

##### ③接触場面と母語場面における問題の対応能力の育成

接触場面と母語場面における問題の分析をもとに、その問題をいかに解決・軽減していくかを検討する問題の対応能力を育成する。

#### 3.2 授業活動の計画

上記の目標に対し、会話データ分析論文を授業で活用する際の利点と限界を検討し、その限界を補うための授業活動を計画した。まず、会話データ分析論文を活用する利点として、コミュニケーション行動の問題を、論文中の文字化データや集計データによって客観的に提示することが可能となる。また、論文中のデータは繰り返し見たり、受講生同士で問題となる現象について話し合ったりすることも可能である。つまり、学習目標②接触場面の問題の分析力と③接触場面の問題の対応能力の育成には有効に働く可能性がある。

一方、限界としては、各論文はそれぞれの目的のために行われた研究であり、必ずしも受講生の日常生活と一致するわけではない。また、あくまでも紙媒体に記述されたデータであり、会話データ分析を勉強したことのない受講生が、文字化データに現れる現象に対してどれほど実感を持てるのか、また、どの程度実際に問題に対応できるのかが疑問である。つまり、論文中の場面の参加者としての意識の程度（学習目標①）や教室外での問題に対する対応の実現性（学習目標③）において疑問が残る。

以上の利点と限界をふまえ、15回の授業は、基本的に、(1) 導入活動（2コマ）、(2) 講義・討論活動（12コマ）、(3) まとめの活動（1コマ）の3つの活動で構成することを計画した。まず、(1) 導入活動では、ファン（2006）を使用して、接触場面とその類型について講義し、接触場面は日本人と外国人が話すという単純な場面だけではないこと、日常生活ではむしろ接触場面が多いということ、受講生自身もその接触場面にこれまで参加してきているということを意識化させることとした（学習目標①）。ファン（2006）は会話データ分析論文ではないため、この導入活動では、できるだけ筆者の接触場面の経験を写真で提示し、受講生が接触場面について関心や実感を持てるようにした。

次に、(2) 講義・討論活動では、主に接触場面のコミュニケーション行動の問題を扱う論文を1コマ1本ずつとりあげ、小グループでディスカッションを行わせることとした。具体的には、まず、教師主導で、論文の研究の背景、目的、データ、分析の方法など、結論以外の部分までを授業の問題提起として紹介した。次に、受講生に論文中のデータを提示し、各現象にどのような問題があり、自分ならどのように対応するか（学習目標②③）を話し合わせた。

最後に、(3) まとめの活動では、それまで扱った問題を復習し（学習目標①②）、授業全体をふまえ、「今日から」教室の外の日常生活において、接触場面の問題に対して何ができるかを考えさせることとした（学習目標③）。(2) 講義・討論活動では各論文中の個別の問題に対して対応策を考えさせたのに対し、(3) まとめの活動では授業の内容全体をふまえたうえで回答させている点で異なる。

なお、日本語教員養成課程の受講生であっても、必ずしも専門が日本語学などではない場合も多く、会話データ分析を経験したことのある学部生は少ない。そこで、会話データ分析はどのように行うのかというデータの収集や

分析の手順、文字化の規則などについても、(2) 講義・討論活動で論文を紹介する際に簡単に解説を行った。

各授業では、授業内容に関連した「課題」を与え、A4版の「課題カード」に課題に対する意見を、ディスカッションをふまえて根拠とともに記述させることとした。これは、各授業活動で取り上げた内容について、会話データ分析論文で扱われている場面の特徴を客観的に分析し（学習目標②）、解決案を提案する視点を養う（学習目標③）ためである。また、自分の場合はどうするのかという当事者としての視点を持って考察させることも目的としていた。

この課題シートの記述内容は、授業担当者である筆者が三段階評価を行い、全てのシートにコメントを記述し、翌週の授業時に復習として一部を紹介する形でフィードバックを行ったうえで返却した。この三段階評価は、課題に対する意見を根拠と共に述べているかどうかで判断し、例えば意見のみであれば減点した。根拠を重視したのは、一般論ではなく、接触場面の分析能力の育成につなげるためである（学習目標②）。なお、授業では課題の回答は与えず、紹介文献を授業終了時に配布して受講生自身が復習として読むように指示した。授業全体の評価は、この毎時の課題シートの三段階評価の集計と記述式の最終テストで行った。

## 4. 分 析

分析では、まず、6年間の講義で活用した会話データ分析論文を論文中のデータの場面と種類から分類し、論文の特徴を探る。次に、その論文を活用した効果について、受講生の課題シートの記述に対する教師の評価をもとに検証する。なお、課題シートの分析では2012年度の授業を分析対象とする。

### 4.1 授業活動で活用した会話データ分析論文の特徴の分析

6年間の授業で活用した論文は全体で21本であり、このうち会話データ分析論文は14本である。会話データ分析ではない論文も含まれるが、学習目標の①～③を達成するための論文を選択した点では一貫している。また、活用した論文の種類は、受講生によって選択したため年度によって異なる。例えば、韓国人の交換留学生在が受講する場合は、日韓のコミュニケーション行動を扱う論文を選択した。

表1は、中井・丸九・大場（2013）を参考に、会話データ分析論文数と論

文の分析対象の場面（母語場面、接触場面、両場面）、データの種類（自然談話、メディア、実験）を集計した結果である。会話データの種類の合計は、1つの論文中に複数のデータが使用されていることもあり、会話データ分析論文数14本より多い。

表1 授業で活用した会話データ分析論文のデータの場面・データの種類の集計

紹介論文数	会話データ分析論文数	データの場面			データの種類		
		母語場面	接触場面	両場面	自然談話	メディア	実験
21	14	9	3	2	11	3	1

表1より、授業で活用した会話データ分析論文の特徴として、母語場面と自然談話の多いことが指摘できる。まず、接触場面のコミュニケーション行動の問題を扱うという目標でありながら、母語場面の文献が半数以上を占めるのは、英語の母語場面（Tannen 1984）、英語と日本語それぞれの母語場面（メイナード1993）を比較する論文があるためである。また、母語場面ではあっても、高齢者の会話（小野田2007）や裁判のやりとり（高木2006）など、受講生の日常生活ではあまり経験しない場면을対象とした論文も含まれる。これらは、受講生が教室外の社会問題を、コミュニケーション行動の問題の分析の視点から考察できるようにすることをめざして選択した論文である。次に、自然談話が多いのは、実際の日常生活における会話を提示することで、授業後もコミュニケーション行動の問題へ意識を向けさせるためである。

会話データ分析論文中の分析項目を見ると、コミュニケーション行動の問題として、会話のスタイル（Tannen 1984）、日米のあいづちの比較（メイナード1993）、初対面会話の質問（中井2002）、第三者返答（オストハイダ2005）、ドラマの女ことば（水本2010）を扱う論文がある。また、教室外の場面の社会問題として、高齢者の話し方と話題（小野田2007）、裁判のやりとり（高木2006）などがある。受講生にとっては日本語教育との関連が見えにくい論文もあるが、例えば高齢者の会話は、EPA 看護・介護従事者<sup>(2)</sup>の話題へつなげ、多様な日本語教育の現場があることを示した。

#### 4.2 受講生の課題シートに対する評価の分析

「3. 授業の概要」で述べたように、各授業では受講生に授業内容に関連した課題を提示し、課題シートに意見を記述させ、三段階評価を行っていた。

表2は、2012年度の課題シートの三段階評価を集計した結果である。三段階評価は、課題に対して、意見とその根拠が書かれている場合は3点、意見のみであったり、現象記述にとどまったりする場合は2点、課題からずれている場合は1点とした。受講生は39名であるが、履修放棄者3名と単位認定の必要のない英語助手1名も含まれる。

会話データ分析論文は、表中のハイライトの3～6、11～13回目の授業で活用している。なお、10回目は学外講師の特別講義<sup>(3)</sup>であったため、三段階評価は行っていない。

表2 2012年度の各授業の課題シートの三段階評価

授業数	出席数	欠席数	三段階評価			授業内容
			1	2	3	
1	39	4	3	14	22	接触場面とその類型1
2	29	14	10	8	11	接触場面とその類型2
3	37	6	3	16	18	会話のスタイル
4	35	8	15	10	10	日米のあいづちの比較
5	34	9	3	11	20	初対面の質問と印象
6	37	6	1	9	27	第三者返答
7	39	4	1	6	32	生活者としての外国人
8	34	9	4	5	25	接触場面の誤解1
9	34	9	7	9	18	接触場面の誤解2
10	29	14	-	-	-	特別講義：国外の日本語教育
11	35	8	4	19	12	ドラマの女ことば
12	36	7	6	7	23	高齢者の話し方と話題
13	37	6	5	13	19	裁判のやりとり
14	35	8	5	2	28	外国人介護・看護従事者
15	39	4	-	-	-	最終テスト

表2より、3点の評価が20人前後を占めることが多く、各授業の目標は概ね達成されていたと考えられる。会話データ分析論文を扱った7回の授業では、6回目の第三者返答（オストハイダ2005）と12回目の高齢者の話し方と話題（小野田2007）を取り上げた授業において、3点がそれぞれ27人、23人

と多い。逆に、3点が少ないのは、4回目の日米のあいづちの比較（メイナード1993）、ドラマの女ことば（水本2010）を取り上げた授業で、それぞれ12人と10人となっている。以下、この評価の違いが出た背景について述べる。

#### 4.2.1 受講生の実感につながったコミュニケーション行動の問題

第三者返答（オストハイダ2005）と高齢者の話し方と話題（小野田2007）を取り上げた授業では、授業で取り上げたコミュニケーション行動の問題が、受講生の実感に強く結びついた点が共通している。第三者返答を扱った授業では、導入で多様な外見の外国人の写真を見せ、受講生に「自分にとって外国人とは誰か」と問いかけたうえで、日本人が日本語能力とは関係のない外見で外国人を判断して第三者返答を行っている実態を示す論文中の集計結果を提示した。次に、論文中の会話例を活用して実際に3人でロールプレイを行わせ、どのように感じるかを話し合わせた。受講生からは、ロールプレイによって、質問したのは自分なのに、その返答が自分ではなく他者に向かって無視されてしまう不快感を実感したという意見と、アルバイトで外国人や子供と話す際に、悪気なく第三者返答をしていたことに気づいたという意見が多く出た。会話データ分析論文にある文字化データを活用することにより、受講生が日常生活の無意識のコミュニケーション行動を再現しながらその現象の実態を分析することが可能となったと考えられる。さらに、そのロールプレイを交替して行うことで、異なる立場の参加者としてそのコミュニケーション行動を追体験することができたと考えられる。つまり、接触場面のコミュニケーション行動の問題を会話データで客観的に示すことで、受講生の日常生活と接触場面のコミュニケーション行動の問題が一致したと考えられる。

次に、高齢者の話し方と話題を取り上げた授業では、高齢者との会話に対する印象を問いかけたうえで、小野田（2007）で紹介されている高齢者の話題と話し方の特徴を紹介した。この文献は、直接的には日本語教育に関わるわけではなかったが、外国人看護・介護従事者とのコミュニケーション行動の問題につなげることを考えて取り上げていた。教師としては、表面上は日本語教育との関連の見えにくく、大学の日常生活とは異なる会話を扱うことで、受講生はあまり関心が持てないかもしれないと考えていた。しかし、受講生には自宅通学で祖父母と同居している学生が多く、小野田（2007）のデータに共感を示す意見が多く出た。また、国語教員の教育実習で介護実習



を経験する学生がいることも、実感につながりやすかったと考えられる。よって、高齢者のコミュニケーション行動の問題の解決策の考察（学習目標③）は、受講生が教室外の自身の日常生活を想定して行えたものと考えられる。

#### 4.2.2 会話データに対する受講生の関心の調整

日米のあいづちの比較（メイナード1993）、ドラマの女ことば（水本2010）を取り上げた授業では、受講生の関心を、当該授業の目的に着目させるという点において、教師の準備が不足していたと考えられる。まず、日米のあいづちの比較では、アメリカ人の話し方の印象を問いかけたうえで、日米のあいづちの違いを論文中の集計結果で提示した。そして、第三者返答を扱った授業と同じように、会話例を活用してロールプレイを行った。ただし、本授業は4回目で、受講生がまだ会話の文字化データを読むことに不慣れであるうえに、会話の話し手ではなく聞き手に着目するという発想がないことが影響したと考えられる。日本語教員養成課程が数多く開講されるようになった現在では、受講生の日本語教育に対する関心の程度にも大きな差がある。このため、他の専門の学生も副専攻などで受講していることもあり、受講生の言語に対する知識が必ずしも十分であるとはいえないこともある。また、日本語学が専門であったとしても、実際の会話の文字化の経験がない場合、非文法な文の多さに注目が向いてしまうこともある。

さらに、英語が嫌いであるという受講生から、英語の文字化データに対して拒否反応が出てしまった。実際には、3回目の授業において、Tannen（1984）の「会話のスタイル」を取り上げているので、英語の会話データ分析論文ははじめてではなかった。むしろ、英語のデータが連続して使用されたことが、受講生からは否定的に評価されたのかもしれない。ただし、本授業では、聞き手の言語行動の1つであるあいづちの数量的な違いに着目させ、実質的な発話は必ずしも精読する必要はないものであった。文字化データとして英語による会話が明示されることにより、逆に受講生が授業の目的につながる情報の取捨選択が困難になってしまったものと考えられる。

次に、ドラマの女ことばを取り上げた授業では、女性の話し方に対する印象を問いかけたうえで、ドラマの中の女性と実際の日常会話での女性の話し方を比較した論文中の集計結果を提示した。本授業では、会話データを活用してロールプレイをするだけでなく、受講生に会話データ分析自体も体験させた（学習目標②）。具体的には、論文とは別に、インタビューが日本語と英

語の両方で掲載されている雑誌記事を与え、オリジナルの英語では性差はないものの、日本語に翻訳された際に男女の話し方の特徴がどのように現れているかを分析させた。この分析活動では、受講生は会話データに出現する男女の話し方の特徴の集計や、会話に見られる多様な現象の発見に夢中になってしまい、課題シートでは、会話の特徴の記述は行ったものの、その特徴に対する意見を述べるに至らない記述が多くなった。つまり、日米のあいづちの比較、ドラマの女ことばのどちらの授業でも、文字化データによって提示される会話の多様な情報に対し、受講生の関心を授業の目的に集中させることが十分にできなかった点に問題があったといえる。

## 5. 考 察

日本人学部生の接触場面の問題に対する無自覚な現状をふまえ、3つの学習目標と授業の活動をデザインし、会話データ分析論文を部分的に活用した授業の実践について、活用した会話データ分析論文の特徴、そしてその効果を授業時の課題シートに対する評価から検証した。授業で活用した論文は、学習目標をふまえ、日常生活における接触場面のコミュニケーション行動の問題を取り上げた内容を選択した(表1、2)。ただし、課題シートに対する教師の評価という観点から受講生の反応をみると、必ずしも教師が予測した通りに受講生が会話データを見たわけではなく、授業によって受講生の課題にとりくんだ結果に差が生じた(表2)。これらから、会話データ分析論文を活用する利点ならびに活用の際の留意点について述べる。

まず、会話データ分析論文の中のデータを授業で活用することで、接触場面のコミュニケーション行動の問題を受講生に対して明確に提示することが可能となり、受講生の実感が伴ったという利点が指摘できる。接触場面の経験が限られた受講生に対し、規範の共有も認識されていないコミュニケーション行動の問題(ネウストプニー1982)を実感させるのは困難である(大場2008)。会話データ分析論文中の、コミュニケーション行動の現象を集計したデータやその特徴を明示する会話データを活用することの有効性が指摘できる。

次に、留意点として、多様な情報を提示する会話データのどこにその授業では着目すべきなのか、という授業活動の目的に必要な情報を取捨選択して読み取ることを強調して指導する重要性を指摘する。授業によっては、受講生の関心が授業の目的からずれてしまうことがあったためである。ただし、

この必要な情報を読み取ることを強調するということは、受講生の反応を強制するという意味ではない。あくまでも、当該授業の目的のための活動に集中できるように導入の方法を調整し、そのうえで、その時の受講生の反応に柔軟に対応する方法を考える必要があると考える。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では、日本語教員養成課程の授業において、接触場面のコミュニケーション行動の問題に無自覚な日本人学部生に対し、会話データ分析論文を部分的に活用することで、接触場面の問題を意識化させ、問題の分析力と対応能力を育成することをめざした授業活動について、紹介文献と受講生の課題シートに対する評価に着目して分析を行った。日本語教員養成課程の受講生であり、実際に日常生活において接触場面の参加者になる可能性のある学生に対して、会話データ分析論文を活用する利点と、データに現れる情報の調整の問題点について指摘した。

会話データ分析は、日常生活の無意識のやりとりが明確に提示される一方で、そのデータの収録や文字化データの作成に研究者の労力が非常にかかる傾向にある。また、受講生に提示したい内容の場面のデータを、必要な時に収集できるとも限らない。しかし、会話データ分析は既に多様な研究が行われている（中井・大場・寅丸2011、大場・中井・寅丸2011、寅丸・中井・大場2012、中井・寅丸・大場2013）。この研究成果は、その研究を積み上げていくだけでなく、本稿の日本語教員養成課程の授業の実践のように、他分野の教育活動に活用するという有効性も指摘できる。

今後の課題として、2点述べる。本授業は、前述のように留学生が受講することもあり、留学生本人から授業でとりあげている接触場面の問題について経験が報告されると、日本人の受講生には、論文中の現象に対する説得力が増すこともあった。本稿では会話データと受講生の実感の関係を検討したが、今後、どのような要因が受講生に接触場面の問題への実感をもたらすのか検討する必要があると考える。

また、本稿では2012年度の課題シートのみを分析対象としたが、6年間連続して使用した論文の評価の変遷や6年分の成績の集計を行うことで、授業を改善する可能性を多角的に検討することが指摘できる。この際、受講生の課題シートの記述内容を質的に検討することで、さらに会話データ分析論文を活用する効果を検証できると考える。

注

- (1) 後期に開講された「言語とコミュニケーションⅡ」においても映像を活用した接触場面の問題の対応能力の育成をめざす授業を実践している（大場2008）。「言語とコミュニケーションⅡ」では、次の3つの学習目標を設定しており（大場2008）、「言語とコミュニケーションⅠ」と連動している。
  - ①接触場面の参加者としての認識：現在の日本では日常生活に接触場面が多くあり、学部生自らが参加者になりうるという認識を持つようにする。
  - ②接触場面の問題の分析力：「外国人」に対するステレオタイプに向き合い、接触場面並びに母語場面の問題を客観的に分析できるようにする。
  - ③接触場面の問題の対応能力：接触場面において問題が発生した場合、その問題を解決・軽減していく視点をもち、実生活でも応用できる能力を育成する。なお、2013年度にも同授業を担当したが、改組に伴うカリキュラム編成により、後期開講のみとなり、上記のような連動がなくなったため、本稿では2013年度は分析対象外とした。
- (2) 経済連携協定（Economic Partnership Agreement）に基づき、外国人の看護師・介護福祉士候補者の受け入れが行われている。国家試験に合格した場合は「候補者」ではなくなるため、候補者とあわせて従事者とした。
- (3) 日本語教員養成課程の科目の1つであったため、国外での教育経験のある講師に講義を依頼した。授業内容は基本的には講師に一任したが、授業の目的は伝えていた。

#### 参 考 文 献

- 大場美和子（2008）「接触場面における問題の対応能力の育成をめざして—日本人学部生に対する映像を利用した授業実践の分析—」『WEB版実践研究フォーラム報告』日本語教育学会 pp. 1-11  
<http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2008sooba.pdf>
- 大場美和子・中井陽子・寅丸真澄（2011）「会話・談話分析の手法を用いた研究論文の社会的意義の考察—学会誌『日本語教育』掲載論文の分析をもとに—」『2011年度日本語教育学会研究集会第10回中国地区（広島）予稿集』 pp. 51-56
- オストハイダ・テーヤ（2005）「“聞いたのはこちらなのに…”—外国人と身体障害者に対する「第三者返答」をめぐる—」『社会言語科学』7-2 社会言語科学会 pp. 39-49
- 小野田貴夫（2007）「高齢者の話す内容・話し方の特徴について」『社会言語科学会

- 第19回大会発表論文集』社会言語科学会 pp. 62-65
- 高木光太郎 (2006) 『証言の心理学 記憶を信じる、記憶を疑う』中公新書
- 寅丸真澄・中井陽子・大場美和子 (2012) 「会話データ分析を行う実践研究論文の社会的意義への言及の考察—学会誌『日本語教育』掲載の実践研究論文の分析をもとに—」『WEB 版日本語教育実践研究フォーラム報告』 pp. 1-10  
[http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2012forum/2012\\_P19\\_toramaru.pdf](http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2012forum/2012_P19_toramaru.pdf)
- 中井陽子 (2002) 「初対面母語話者／非母語話者による日本語会話の話題開始部で用いられる疑問表現と会話の理解・印象の関係—フォローアップ・インタビューをもとに—」『群馬大学留学生センター論集』第2号 群馬大学留学生センター pp. 23-37
- 中井陽子 (2012) 『インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』ひつじ書房
- 中井陽子・大場美和子・寅丸真澄 (2011) 「会話・談話分析の社会的意義の考察—掲載論文の分析をもとに—」修剛・李運博 (主編) 『跨文化交际中的日语教育研究②異文化コミュニケーションのための日本語教育』高等教育出版社 pp. 628-629
- 中井陽子・寅丸真澄・大場美和子 (2013) 「学会誌『社会言語科学』掲載の会話データ分析を行う論文の考察—社会的意義への言及の分析をもとに—」『社会言語科学会第31回大会発表論文集』 pp. 202-205
- ネウストブニー、J.V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』岩波書店
- ネウストブニー、J.V. (1995a) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- ネウストブニー、J.V. (1995b) 「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7 大阪大学文学部日本学科 (言語系) pp. 67-82
- ファン・サウケン (2006) 「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所『日本語教育の新たな文脈』アルク pp. 120-141
- 水本光美 (2010) 「5 テレビドラマ“ドラマ語”としての「女ことば」」中村桃子編『ジェンダーで学ぶ言語学』7 世界思想社 pp. 89-106
- 村岡英裕 (2003) 「アクティビティと学習者の参加—接触場面にもとづく日本語教育アプローチのために—」宮崎司朗／ヘレン・マリオット編『接触場面と日本語教育—ネウストブニーのインパクト』明治書院 pp. 245-259
- メイナード、S. K. (1993) 『会話分析』くろしお出版
- Tannen, D. (1984) *Conversational Style: Analyzing Talk Among Friends*. New Jersey: Ablex Publishing Corporation.

## 付 記

本研究は、平成25-27年度科学研究費助成事業 (基盤研究 (C)) 「会話データ分析の

活用法の研究―「研究と実践の連携」のための教員養成用の教材開発―（課題番号：25370581、研究代表：中井陽子）の研究成果の一部である。